

# 住まいを考える

生きていくために必要な拠点である住まい。多様化する生き方によっても、そのライフステージによっても、求める住まいは変わってくる。自分の生活や人生に合わせて自由に住まいを選べる一方、資金面を考えれば男性と比べて相対的に所得の少ない女性にとっては厳しい選択にもなりうる。安心して生きていける快適な住まいや住まい方とはどのようなものなのかを探してみたい。

## 建てて、いい？

中島たい子著、講談社、2007年

913  
ナ

主人公の万里は、従妹が社長の通販会社に勤めて4年経つが、職場では力量を出し切れない日々を送る。アパートの階段での転倒をきっかけに住替えを模索するうち、自分は自分の居場所である家が欲しいと気づく。30代の独身女性が家を建てるといえば周囲の反応は騒々しい。そんななか親の所有する土地を当てにしてモデルハウスを見学に行くが、どれもみな家族仕様であることに疑問を持つ。自分仕様の個性的な家を建てるために、奔走し、行動する彼女の姿は逞しい。独身女性が堂々と家を建て、自分の人生を切り拓いていく生き方に共感しポジティブになれる本。

## 家族と住まない家 血縁から〈暮らし縁〉へ 島村八重子・寺田和代著、春秋社、2004年

365  
シ

血縁や婚姻関係を越えた他人と暮らすことを選んだ20代から70代までの実践者10人へのインタビューをもとに構成されている。これまでの住まい史や生育歴、そのことが今の生活にどのようにつながっているかに注目し、家族であるがゆえに抱えてしまいがちな閉塞感に風穴を開け、適度な距離をもって他人と快適に暮らすという新しい住まい方を探る。具体的にはコレクティブハウス、ルームシェア、高齢者のグループリビングなどであり、運営する組織の概略も記されている。「家族と住む」という固定観念から解放され、自分の生き方や住まい方をもう一度見つめ直す可能性を感じさせてくれる。



## 若者たちに「住まい」を！格差社会の住宅問題 日本住宅会議編、岩波書店、2008年

365  
ニ

格差と貧困の中にいる若者たちの生活保障の基盤となる住宅政策の現状と課題を示す。ハウスシェア、ゲストハウスなどと多様なシェア住居の事例を紹介する。女性が望む安心感や経済性・利便性などのメリットとシェア住宅が注目される理由とは重なり、20代や30代の若い女性たちの利用者が多いこともうなずける。先進8カ国の若者の家族の形と住宅事情の現状比較を含めて、住宅問題の課題解決をも提案する。日本の住宅セーフティネット法にもふれ、弱者保護や少子化問題と関連づけ、「安心して住む」という暮らしの保障が今後の施策の課題となると提示する。

## からっぽのいえのつくり方

「まちなか狭小住宅」は共働き子育て家族を救うか  
澤章著、文芸社、2007年

527  
サ

共働き子育て期の著者が、土地探しから始めて、こだわりの家を建てたドタバタ記。あえて郊外を捨て、これまでの生活や人間関係を維持できる「まちなか」を選択、夫婦の通勤時間を各々30分以内に設定、その甲斐あっての絶妙な子育て連携体制には思わず拍手を送りたくなる。家庭内の男女共同参画を実現するための、見事なまでのアイデアを設計に反映させている。子どもが小さいうちに建ててこそ意味があり、住む人が空間をその時々で柔軟に使い分け、皆が自由に動き回れる「からっぽのいえ」が理想だったという。こうすれば無理なく共働きを続行できそうだと、なるほど納得の一冊である。



## 今から考える終の棲み家

大沢久子著、平凡社、2007年

365  
オ

シングルであり、終の棲み家を考える会の代表である著者が、人生の最終章の過ごし方について取材やネットワークで得た情報をまとめた。介護ビジネスの発展とともに、生活拠点の選択肢が増えた。本書は棲み家を軸に、子どもと離れて暮らす母親や家族を持たない女性など、様々な視点から老後を考える。予想される年金受給額をみて、年金収入額より支出額が大幅に上回って愕然とした女性もいたという。ゆとりある老後を迎えるには、健全な年金制度が必要であること、個々が生活設計力を身につけることだと提言する。

## 私たちの21世紀 No. 54

特集：ジェンダーから見る住まい・居住権  
アジア女性資料センター、2008年（雑誌）

風雨をしのぐ以上の意味が、住まいにはある。一括で買うには高価すぎ、賃貸でも毎月一定額を住居費に当てねばならず、その支出を抑えるなら設備・居住スペース・地域などの住環境は二の次になる。劣悪な住環境も問題だが、住所不定では最低限の社会保障を受けることも難しい。13のレポートは、シングルマザー・DV被害者・高齢女性など、様々な女性の問題に住まいが関わっていることを伝えている。経済格差や暴力や心身の安全と住まいは直結しており、基本的人権としての「居住権」から見直すと、実は誰もが危うさを抱えていることに気付かされる。

